オアシス

文責：学 長
桑 原 雅 次

出雲芸術アカデミーだより　２０２２年１１月６日発行　第５５号

出雲地方独特の暦の呼称である「神在月」は、実際には旧暦の 10 月（新暦ではおよそ 10 月下旬から 11 月中旬）であり、まさに 11 月は全国の神々が出雲大社（いずもおおやしろ）にお集まりになっている最中です。11 月の出雲地方がパワースポットしても知られるようになり、観光客が大勢押し寄せるようになったと聴き及びます。来年の 10 月 29 日に上演予定の「連作交響神樂《國讓》」は「神在月」の公演となります。「音楽のまち出雲」が盛りあがっていけるよう神様にお願いするのは今が絶好の期間です。＜パチパチパチパチ＞

◎ マタイ受難曲を見事に上演！

「マタイ受難曲」とは何？　という方も多いのかも知れません…。音楽関係者なら理解できても一般の方々には馴染みが薄いと思われます。しかし、キリスト教信者にとっては、神聖なる神そのものの物語ですので、信仰上において絶対的に理解しておかなければならないことでしょう。今回上演された「マタイ受難曲」は、音楽の父と言われるヨハン・セバスティアン・バッハ（以下、バッハ）が、新約聖書「マタイによる福音書」の 26、27 章のキリストの受難を題材に作曲した音楽作品です。この作品は、バッハの死後、長らく世の中から忘れ去られていましたが、メンデルスゾーンがバッハ作品の整理・見直しを試み、「マタイ受難曲」を甦らせた功労者として今日に伝えられています。

バッハの「マタイ受難曲」は、全 68 曲からなる壮大な構成になっており、すべてを上演すると３時間を超えてしまいますので、今回は、60 分に短縮された「ハイライトコンサート」としてお届けいたしました。また、今回のコンサートは、マエストロ・プロデュースによる「交響神樂プロジェクト」の一環として行われました。そのようなことから、第１部を『みっちーとマエストロの音楽談話』として設定し、「マタイ受難曲」と「連作交響神樂」の世界を語っていただきました。来年 10 月「神在月」に上演予定の最終章「交響神樂《國讓》」に向けての意識づけと PR にもつながりました。

第２部は、「マタイ受難曲」ハイライト（19 曲）の上演です。舞台上の構成は、ソリスト４名が主な登場人物の場面をそれぞれ歌いあげ、それにソプラノ、アルト、テナー、バスパートによる合唱団群集が物語に沿い、合唱によって豊かに場面表現をしました。コロナ禍によって歌う時にはマスク着用を余儀なくされていた期間が長く続いていましたが、今回はマスク無しの上演が叶い、久しぶりにダイナミックな合唱が聴けたことに感動

裏面へ

を覚え、舞台芸術に対する関心が再び蘇ってきたように感じました。それを支えていたのは、ピアノ・チェンバロ、オルガン、ファゴットによるオーケストラ部分を担当してくださった皆さんです。特に今回はオルガンの響きが出雲フィルの演奏会では珍しく、教会音楽の雰囲気をとても新鮮な感覚として受け入れることが出来ました。また、今回は原語（ドイツ語）で上演しましたので、観客の皆さんに少しでも内容を理解していただくために字幕スーパーを準備しました。字幕と舞台の進行とのタイミングを計るのはとても大変だったと思いますが、演奏者と観客が一体となる一因となったことは言うまでもありません…。

来年上演予定の「連作交響神樂《國讓》」もそうですが、公演事業には様々な立場の皆さんの結束が必要となります。舞台上の合唱団やオーケストラの皆さんは勿論ですが、いわゆる裏方で支えてくださる皆さんや事務局スタッフの方々の協力が不可欠となります。これから予定されている公演事業が関係者の総合力で盛りあがることを期待したいと思います。そして、今回のバッハによる「マタイ受難曲」は、山陰地方で上演されるのはとても珍しいことでした。このことは、「音楽のまち出雲」の勇気と誇りに繋がる出来事として記憶に残ることでしょう。

◎ iPhil ブラスアンサンブル試演会を開催！

ブラスアンサンブルとは、金管楽器を中心とする少人数の合奏団を意味します。この度、本アカデミーの本科と別科の金管楽器受講生と講座指導者の皆さんが一緒になり、試演会が開催されました。試演会を開催するにあたり、出雲フィルハーモニー客員首席指導者を務める“中村一男”氏（ホルン）、“福中明”氏（トランペット）の両氏に指導をお願いし、演奏技術の向上や他の人と合わせるタイミングなどのコツが学べたことは大いに意義深いことでした。また、人前での発表体験は今後の演奏活動に勇気を与えたことでしょう…。

開会のファンファーレは、ジュニアの皆さんと参加者により高らかに始まりました。最初は、別科受講生と本アカデミー講座指導者による「トロンボーン６重奏」から始まり、同じく「ホルン４重奏」が続き、それぞれの楽器特有の趣のあるアンサンブルに新鮮さを感じさせてくれました。次の客員首席指導者と本アカデミー講座指導者による「金管５重奏」は、アンサンブル技術のお手本とでも言いましょうか、参加者が直に聴いて学べる機会となりました。最後は、本科受講生（ジュニア）と客員首席指導者及び本アカデミー講座指導者による「金管アンサンブル」でした。これまでは、客員首席指導者の両氏と本科の受講生の皆さんとの接点がありませんでしたが、今回の試演会で一緒に演奏できたことは、何物にも代えがたい素晴らしい体験となったことは言うまでもないことと察します。

このような自主的な取り組みを通して、学ばされる環境から自ら学ぶ環境への変化に繋がり、技術の向上はもとより音楽そのものの楽しさもきっと倍増したことでしょう…。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します https://www.izumo-zaidan.jp/academy/】